

弾き歌い指導における集団授業の取り組みについて

The Effects of Large Group Instruction on Teaching Methods for “Singing and Playing”

子ども支援学科非常勤講師

鈴木 顕子・市川 裕加・栗村 葉子・鈴木 洋子・久 弥生

1. はじめに

近年私たちを取り巻く環境は実に様々であり、子どもをめぐる環境も多彩である。多様なあらゆる子どもの心身共に健やかな育ちを支援するために、高い資質を持った保育者への期待は高まりを見せている。子ども学部子ども支援学科では、そのような高い資質を持った人材を育成する保育者養成の役割を担い今年で4年目になる。

アメリカの幼児教育の研究者であるマクドナルドとサイモンズは著書の中で、乳幼児期の音楽に関するリサーチの結果、生涯にわたる音楽への態度や理解力の多くが就学前の時期に形成されることを示し、6才までの年齢は最も感覚が発達している時期であると述べている（マクドナルド；サイモンズ 2009：46；57）。このことは、乳幼児期に通う保育の現場での音楽活動がいかに重要であることを示しており、それを担う保育者の育成が重要になってくる。

子ども支援学科における音楽に関わる総合実践科目（子ども学の実践力を獲得するための基礎・応用）として、1年次で「子どもの音楽Ⅰ」・「子どもの音楽Ⅱ」、2年次で「子どもの音楽Ⅲ」・「子どもの音楽Ⅳ」の授業が設定されている。「子どもの音楽Ⅲ」・「子どもの音楽Ⅳ」の授業では通常弾き歌いを中心とした少人数指導を行っているが、それに追加して半期に1回ずつ集団授業を設定している。実際の子どもの音楽活動の様子を知り、保育者の音楽性を高めることを目的に、現在まで6回の集団授業が実施された。

本稿ではまず集団授業を実施している「子どもの音楽Ⅲ」・「子どもの音楽Ⅳ」の授業の概要について述べ、次に集団授業の概要について述べる。その後、4回の集団授業の報告を各担当者より行う。さらにこれらの授業に対しての総括したまとめとして、集団授業の効果や今後の課題について考察していきたい。

2. 「子どもの音楽Ⅲ」・「子どもの音楽Ⅳ」の授業の概要について

「子どもの音楽Ⅲ」・「子どもの音楽Ⅳ」の授業の概要について述べる前に、それらに先立って行われる「子どもの音楽Ⅰ」・「子どもの音楽Ⅱ」の授業について簡単に述べておくこととする。1年次に行われる「子どもの音楽Ⅰ」の授業では、子どもの音楽活動に関わる、音楽の基礎的な知識、技能を身につけることができることを、「子どもの音楽Ⅱ」では、「子どもの音楽Ⅰ」で培った子どもの音楽活動に関わる音楽の基礎的な知識、技能を高め、実践することができることをそれぞれに到達目標としている。いずれも半期授業で、集団の形態で行われる。まず学習者自身の音楽性を高めるために、リトミックの手法を用いた学習を行い、子どものうたの弾き歌いも行う。

続いて2年次に行われる「子どもの音楽Ⅲ」・「子どもの音楽Ⅳ」の授業もそれぞれ半期授業であるが、集団形態ではなく音楽技能の習熟度別による編成の6人前後の少人数グループでの指導を行い、効果的な音楽技術の向上をめざしている。1年間で約40曲の子どものうたを扱い、実際の保育に活かすことができるために弾き歌いを中心に行い、半期ごとに中間試験、期末試験を実施している。

「子どもの音楽Ⅲ」の授業の到達目標は、「子どもの音楽表現を支える、うたとピアノの技術を身につけ、実践に活かすことができる」ことであり、具体的には、以下の3点である。

- 1) 子どものうたにふさわしい「歌い方」「伴奏の仕方」「弾き歌い」ができる
- 2) 子どものうたのレパートリーを増やし、実際の保育に活かすことができる
- 3) 子どもの音楽表現活動に用いる即興演奏ができる。

「子どもの音楽Ⅳ」の授業の到達目標は、「子どもの音楽表現を支える、うたとピアノの技術をさらに向上させ、実践に活かすことができる」ことであり、具体的には、以下の3点である。

- 1) 子どものうたの曲想、保育の場面にふさわしい「歌い方」「伴奏」「弾き歌い」ができる
- 2) 子どものうたのレパートリーをさらに増やし、実際の保育に応用することができる
- 3) 子どもの音楽表現活動に必要な即興演奏、アレンジメントができる。

弾き歌い授業はともすればピアノや歌唱の技術・技能の習得や向上に重きが置かれがちであるが、それさえできれば実際の保育現場で子どもと活動するのに十分と言うことではない。子どもの心身の発達を考慮し、子どもと音楽活動をする場合はどのように弾き歌いすれば良いか、子どものうた一曲一曲にふさわしい音楽表現を考えたり、顔の表情も大事にしたりするなど、技術面以外も大事にしながら指導を行っている。学生個々の習熟度に差はあるが、一人一人の能力に見合った到達点を見出し励ましながら全ての学生に達成感や満足感が得られるように心がけている。

「子どもの音楽Ⅳ」の授業の到達目標の3つ目の「子どもの音楽表現活動に必要な即興演奏、アレンジメント」については、日頃の授業ではなかなか多くの時間を割くことが難しい。その分、集団授業ではこれらを体験する良い機会となるよう考慮している。これについては、最後のまとめで述べることにする。

また、弾き歌い以外にも保育の現場に役立つ実践的な表現活動としてわらべうた・伝承あそびを取り入れ、学生一人ずつが保育者役になり他の学生に模擬保育を行い、あそびを紹介する試みも行っている。弾き歌いとは異なる無伴奏のあそびうたのレパートリーも増やし、保育現場で楽器を使わない場合にも役立つ試みと考えている。

3. 集団授業の概要について

どのように集団授業を行っているかを具体的に述べる。これらの集団授業は外部講師でなく、日頃「子どもの音楽Ⅲ」・「子どもの音楽Ⅳ」の弾き歌いを指導している講師が行っている。これらの講師は全員が専門的な音楽教育を受け、実際の子どもの音楽活動に長く携わっている。指導内容は歌唱・ピアノ・リトミック・合奏等であり、指導現場としては、幼稚園・保育園・音楽教室・児童館・子育てサークル、またはコンサートといった子どもと実際に関わりがある現場である。

講師は現場の子どもの様子を具体的にイメージしながら日頃指導している学生に授業を計画し実施している。学生自らが子ども役となり音楽活動を体験しその目的を理解することは、学生にとって実際の音楽活動の様子を知るうえで非常に有意義であると考えている。

また、保育者としての音楽性資質を考えた場合、学生たちに足りないと思われるもの、身に付けてほしいもの、高めてもらいたいものを内包しながら行っている。

以下、順に4回の集団授業での取り組みを授業担当者より報告する。(1.～3. 鈴木 顕子)

4. 授業報告

4-1. 「アンサンブルの可能性を探る」

授業担当 市川裕加

実施日 2015年6月11日(木) 1限 2年17名／2限 2年19名／3限 2年14名

ねらい ①アンサンブルのアイデアとその可能性を知る。

②仲間と音を合わせる楽しさを体験、実感する。

4-1-1. 授業記録

(1) アンサンブルのアイデア① ～楽器を使って～

保育における音楽活動でよく使用される楽器、タンブリン、カスタネット、鈴、トライアングルの紹介や、その他、様々な民族楽器などの紹介。

今回は90分間の1回限りの授業で時間も限られているため、楽器でのアンサンブル体験は行わず、良く知っている楽器でも音の鳴らし方は一つでは無く、様々な鳴らし方が出来ること、そして子供達でも使いやすい様々な民族楽器の紹介をするに留めた。

(2) アンサンブルのアイデア② ～紙コップを使って～

- ・楽器の代わりに使える身の回りの物（紙コップ、乳酸菌飲料の空き容器、ラップの芯、他）、そしてその利用方法などの紹介、また学生たち自身で経験のあるアイデアの情報交換も行った。
- ・様々な身の回りの物の中から今回は紙コップを使い、まずはどのような音を鳴らすことが出来るのか、学生達全員に紙コップを1個ずつ渡し、それぞれのアイデアで鳴らしながら音探しをさせる。その後、一人ずつ紙コップの音の鳴らし方のアイデアを発表、また他者の鳴らし方のアイデアを模倣し全員で鳴らしその音の変化を聞く、などの体験をする。
- ・紙コップを使ったリズムアンサンブルをするため、譜例1のリズムフレーズの鳴らし方を全員で覚える。
- ・譜例1のリズムフレーズを全員で合わせて鳴らす、テンポを変化させて鳴らす、クラスを2グループに分けてアンサンブルの様子を見合う、2グループや数グループに分かれ2小節、1小節、1拍遅れのリズムカノン（輪奏）をする、などの体験をする。

譜例1 映画「Pitch Perfect」の「CUPS」より¹⁾

(3) アンサンブルのアイデア③ ～ボディパーカッション～

(2) で覚えたリズムフレーズを使い、ボディパーカッションをする。

例えば、譜例1の中のaのリズムは足踏みをし、bは腿を手で鳴らす…という様に、各クラスで身体のどここの部位をどの様に鳴らすか、全員で意見を出し合いながら1つのオリジナルのボディパーカッションを創る。それを全員で合わせて鳴らす、またクラスを4グループに分け、2小節遅れのリズムカノンにするなどの体験をする。

(4) アンサンブルのアイデア④ ～合唱～

全員で「WAになっておどろう（作詞・作曲：長万部太郎）」を合唱する。

4-1-2. 授業を終えて

保育現場での音楽活動において、アンサンブルは欠かせないものとする。

今回の集団授業では、学生達が実際にアンサンブルを体験し、合わせる事の楽しさを実感してもらいたいと授業を行った。また、アンサンブルはアイデア次第で様々な可能性があること、楽器や身の回りの物でも使い方、鳴らし方の工夫によって可能性は一つではないということを感じてもらえる様、授業を展開した。

通常授業では主に弾き歌いの学習を行っており、普段から子どもの歌を取り上げる機会が多い。そのため今回は歌以外の、特にアンサンブルのアイデア②、③のリズムアンサンブルに時間を使った。学生自身が音を合わせることの楽しさを十分に実感させる事を考え、簡単すぎず難しすぎない難易度のリズムフレーズを選んだこともあり、授業後も学生同士で引き続き紙コップのリズムアンサンブルを楽しむ光景も見られた。

また、日頃取り組んでいる弾き歌いも、将来的に子どもが歌うことに合わせて伴奏をすること、伴奏をしながら子供たちと一緒に歌うこと、つまりアンサンブルをするために必要な学びであるという事を改めて感じてもらいたいという思いを込めて、最後は全員で合唱をして授業を締めくくった。

筆者自身、仲間と共に演奏した体験、記憶は特に強く残っている。そして今まで経験してきた様々な音楽体験が、子ども達と音楽活動をする上でも大きく影響されていると実感している。今後、通常授業においても保育者を目指す学生自身が、音楽の楽しさや仲間と合わせる喜びを体験し、それが子どもたちの豊かな音楽体験に繋がる様、工夫をして授業を行いたい。

(市川 裕加)

4-2. 「音楽の呼吸を感じ表現する」

指導担当 栗村葉子

実施日 2016年11月1日(火) 2限 2年A組35名／3限 2年B組35名／4限 2年A・B組30名
ねらい ①保育の音楽活動を支えるために重要な「呼吸」に着目したアプローチ方法を体験する。

②音楽の中の「呼吸」を感じ、その感覚を保育に生かして、音楽的に子どもを導くことを学ぶ。

③クラスの仲間と「呼吸感」を生かした音楽作品を創り、発表する。

4-2-1. 授業記録

(1) 保育における音楽活動を体験(40分間)

「呼吸を感じる」ことをテーマに、『秋の一日』と題して、リトミックを取り入れた保育の音楽をイメージした活動を展開し、実際に学生は子ども役として動いた。

<主な活動内容>

- ・音楽活動の行えるホールに集まり、整列・挨拶
- ・活動の導入、先生と呼吸合わせ(指導者の息を吸う→はく を意識させる)
指導者の合図無しで同時に手拍子を鳴らす、一緒に座るなど
- ・音楽の中のエネルギーのあるところ(リトミックのクルーシス)を感じる活動
- ・「やきいもグーチーパー」の歌からリズム活動への展開
グー→ 四分音符、 チョキ→ 八分音符、 パー→ 二分音符
ピアノで弾く各リズムを聴き、リズムに合わせてステップする
学生各々が各リズムを担当し、自分のリズムの時に動く
- ・グー(カスタネット)、チョキ(鈴)、パー(タンブリン)のリズムを使ったアンサンブル
指揮者の呼吸を感じて、ビートを刻む指揮に合わせて楽器を鳴らす

- ・ゲー、チョキ、パーをイメージして身体自由表現
- ・ソルフージュの活動

(2) 保育者役を体験 (15分間)

- ・前半で体験した「呼吸あわせ」の保育者役を体験
呼吸を示しながら掛け声無しで、手拍子を同時に行う、一緒にジャンプするなど
- ・声による言葉のアンサンブルの指揮者になる
子どもに呼吸を感じさせながら、指揮で導くことの体験
指揮者役は、呼吸・テンポ・ダイナミクスなどを身体全体で表現する。
子ども役の学生は3パートに分かれ、にんじん・きゅうり・ナスの言葉を各々担当する。指揮者役はビートを刻みながら指示を出す。その指揮者の示す呼吸に合わせて、生徒役は各担当の野菜の名前を声に出し、即興で言葉のアンサンブルを行う。

(3) 言葉のアンサンブルをグループで創作・発表 (35分間)

- 小人数 (5～8名) のグループに分かれて、言葉のアンサンブルを創る。
グループ毎にテーマを決め、そのテーマにあう言葉を考え、アンサンブル作品を創作する。
各グループ内で指揮者を決め、その指揮者はビートを刻みながら指示を出す。他の人は指揮者の示す呼吸を感じながら声を出しアンサンブルをする。
それぞれのグループが作った主なテーマは「地名 (出身地)」、「駅名」、「好きな食べ物」、「人名」、「桃太郎」 などがあった。
例：『桃太郎』のグループの言葉 「もも」、「パッカーン」、「どんぶらこ」

4-2-2. 終了後の学生の感想より

- ・前半ではたくさんの活動をしたが、同じ動き・音・リズムがつかわれていて、子ども達が安心して取り組める姿が想像できた。短い時間でこれだけ内容の濃いものが出来ることを知った。
- ・保育者の表情で子どもの感じ方が変わることに気付いた。実際に指揮をしてみて相手に伝わりやすくするには、どのようにしたら良いのか考えた。「音のイメージを身体で表現する」など意図のある保育をしたいと思った。
- ・子どもたちと息を合わせるには保育者の息づかいや視線、手足の動き、身体の動き全てが子どもの表現活動に大きく影響しているのだと思った。
- ・子ども達が楽しく表現していくためには、何より保育者自身が心から楽しむ必要があることを実感した。
- ・グループで作品を作り発表した時に指揮者を担当したが、誰が何を担当しているかを理解していないと上手い出来ないことを感じた。またそれは一人一人の子どもを理解して保育することなのだと感じた。

4-2-3. 授業を終えて

日頃はピアノや歌の技術向上、またそれらを使った表現を重点的に指導しているが、それだけでは伝えきれないことが沢山あり、今回は保育で子どもを音楽的に導くことに焦点をあて、学生には子ども役や保育者役を体験させながら授業を展開した。

音楽活動で「呼吸」を大切にすることは、子どもを導く上で重要であるということは伝わったようである。またそれは保育の他の場にも通じる部分がある、という気づきのあった学生も出てきたことは嬉しいことであった。

仲間との創作活動は、短時間であったが、いろいろな意見を出し合いながら各々工夫もみられた。また他のグループ作品を見合うことで創作や発表には様々なアイデアがあり、表現の幅・見せ方の工夫などたくさんの刺激を受け、学びがあったようだ。

しかし、1回の授業内では足りない部分もあり、もっと自由な発想で表現させたり、今回の活動全体がどのようにつながっているかということを再確認する時間も取りたかった。今後も日頃の授業で行っている即興の学びが、このような活動に生かせることを更に伝えていきたいと考えている。(栗村 葉子)

4-3. 「幼稚園における音楽遊び」

指導担当 鈴木洋子

実施日 2015年11月17日(火) 2限 2年A組37名／3限 2年B組39名／4限 2年A・B組32名

ねらい ①幼稚園で実際に行なわれている音楽遊びを体験するとともに、レパートリーを広げ、保育に応用できるようにする。

②遊びの中に込められている保育者の願いを知る。

4-3-1. 概要

筆者は、さいたま市内にあるキリスト教保育のH幼稚園に、リトミック講師として勤務している。この園には、保育者と子どもたちによって永く大切に歌い遊び継がれた音楽遊びが多数ある。それらは、現在数多く出版されている遊び歌の書籍の中にはあまり見かけないスタイルの遊びも多いことから、今回の授業で紹介することとした。

授業は、園の11月の行事である誕生会、収穫感謝祭の一部分を再現するようにサークルで椅子に座って行ない、季節の歌と音楽遊びを織り交ぜ、学生は子ども役として体験した。

4-3-2. 授業で紹介した主な遊びについて

(1) ともだちいらっしゃい(譜例2)

この歌は、歌劇「ヘンゼルとグレーテル」(フンパーディング作曲)の中の「一緒に踊りましょう」がもとになっている。

遊びの最初は、一人から始める。歌に合わせて友だちを一人誘い、ペアで踊る(1番)。2番では、この二人がそれぞれ友だちを一人ずつ誘いに行き、2組のペアが踊る。1、2番を繰り返す中で、1人→2人→4人→8人→16人…というように踊る人数が増えていく歌遊びである。この後に紹介した「にんじんだいこんかぶら」も同様のスタイルの遊びである。

歌に合わせて、友だちを誘う喜び、誘われる嬉しさを体験することにより、日常の遊びでも仲の良い友だちだけでなく、友だちの輪を広げていけるようになって欲しい、という願いのこもった遊びである。この園の保育者は、このスタイルの遊びの最初の一人を誰にするか、ということをとっても大切に考えている。単に「やりたい」と手を挙げた子どもではなく、ちょっと自信のない子どものチャレンジの場になったり、何でも一番初めにやりたがる子どもにとっては少し我慢してから巡ってくるチャンスだったり、その子どもに合った機会にできるように配慮している。

譜例2 「ともだちいらっしやい」 フンパーディング作曲 作詞者不詳

ともだちいらっしやい

ともだち いらっしやい おててを ください かかと あげて くるり と まわりましょ

おててで ばちばちばち おくつで とんとんとん かかと あげて くるり と まわりましょ
おめめで ばちばちばち おくびで うんうんうん

(2) 庭に出て遊ぼう (譜例3)

(1) のように友だちを誘う遊びであるが、1 回歌うごとに友だちを一人誘うため、誰を誘うか相談をする、という要素が加わる。好きな友だちを誘う喜び、「○○ちゃん、遊びましょ」と歌で誘われて輪の中に加わる嬉しさ、今度は自分呼んで欲しいと待つ楽しみ、呼ばれずに残念な気持ち、など、踊っている子ども、歌ったり手をたたいたりして見ている子ども、それぞれに様々な気持ちで参加することができる。歌を通して、誘う、誘われて参加する、相談する、など、楽しみながら、友だちとの関わりの体験ができる遊びである。

譜例3 「庭に出てあそぼう」 作曲者、作詞者不詳

庭に出てあそぼう

にわにで てあ そぼう にわにで てあ そぼう にわにで てあ そぼう (はる)の ひに

○ ○ちゃん ○ ○ちゃん あ そび ましょ ○ ○ちゃん ○ ○ちゃん あ そび ましょ

て を とり て お どり ましょ て を とり て お どり ましょ

うらうら うら うら うらうら うらうら うらうら うら うら うらうらうらう

(3) 番犬ゲーム

この遊びに歌はなく、音をさせない音遊びである。集まりのサークルの中央に、番犬役の子どもの目がつぶって椅子に座る。その椅子の後ろに、宝物として鈴など音のする物を置く。泥棒役の子どもは、音をさせないように一定の距離まで宝物を運ぶゲームである。番犬役の子どもは、音や気配を一生懸命に感じ、泥棒が宝物を盗ったのに気づいたら吠える。番犬役、泥棒役だけでなく、見ている周りの子どもたちも静寂を保つために、とても集中力の必要な遊びである。

(4) てにもつなにあに (譜例4)

(3) と同様に、サークルの中央に子どもが一人目をつぶって椅子に座る。歌が始まると、保育者はサークルの子どもたちにある品物を見せてから、中央に座っている子どもの後ろ手に持たせる。触っただけでその物が何かを当てる遊びである。その時のテーマに応じて品物を選び(遊具、野菜、果物、日用品など)、当てた後、分類の活動に発展させたりすることもあるが、大切なのは、その物の素材の感触、温度、大きさ、形などを手でしっかり感じることである。

譜例4 「てにもつなにあに」 律動遊戯曲譜集より

てにもつなにあに

て に も つ な に あ て た ら え ら い

さ わ っ た だ け で あ て た ら え ら い

4-3-3. 授業を終えて

今回紹介した遊びのほとんどは、歌がコミュニケーションの手助けをしてくれているものである。他の園ではあまり出会えないスタイルの音楽遊びを体験する貴重な機会と考え、体験することに時間を取りすぎてしまったため、それぞれの活動について、振り返ったり、話し合ったりする時間を十分にとることができなかったが、学生たちは、これらの遊びを体験したり、園での遊びの様子を聞いたりすることによって、遊びの中に込められた保育者の願いを感じ取ってくれたようである。

永く歌い継がれた遊びがほとんどであったことから、学生たちには古めかしく感じられたかもしれない。しかし、これらのシンプルな遊びは、この園の子どもたちに受け入れられ、飽きることなく楽しまれていることから、わらべうたなどの伝承遊びのように、古きよきものを伝え、残していきたいと考えている。

さらに、変化や創造を楽しむような遊び歌など違うスタイルの音楽遊びを紹介したり、学生が保育者役を体験したり、新たな遊び方を考えたりするなど、学生たちの音楽遊びのレパートリーを広げ、子どもたちの思いを受け止めながら柔軟に楽しむための応用力を身につけられるような授業を工夫していきたい。その柔軟な応用力は、音楽のみでなく、他の表現分野や日常の保育にも役立つものと信じている。

(鈴木 洋子)

4-4. 「音楽活動において大切なこと」

指導担当 久 弥生

実施日 2016年6月14日(火) 2限 2年B組52名／3限 2年A組50名

ねらい ①弾き歌いの課題として習った曲で音楽あそびを体験する。

②子どもの目線で保育者の見え方を感じる。

③音楽あそびの展開の仕方と可能性を知る。

4-4-1. 授業記録

(1) 音楽活動を体験(30分間)

1年から2年の前期中間試験までに扱った曲を中心に、30分の音楽あそびプログラムを子ども役として体験する。

<主な活動内容>

音楽活動の行えるホールに集まり、整列・挨拶

・「ごあいさつの歌」作詞・作曲：山本 誠

活動の導入として、身近な「こんにちは」という言葉をリズムやメロディーに乗せて歌うことで自然と音楽活動に入り込むことができる。

・「やきいもゲーチーパー」作詞：阪田 寛夫 作曲：山本 直純

音楽のないまねっこあそびから歌遊びへ導入する。最初はゆっくりのテンポで、ポイントとなる場面では少し間をとって真似をさせ、言葉での説明はほとんど行わない。音楽を途切れさせずに活動を進めることで音楽あそびの世界に入り込みやすくする。同じ曲で対象の年齢が違う場合のあそびの展開も紹介する。座ったままの活動。

・「かなづちとんとん」訳詞：高木 乙女子 外国曲

再び音楽のないまねっこあそびから歌遊びへ導入する。1～6番までをただ歌い体を動かすだけでなく、歌のはじめに子ども達に質問を投げかけ決まったポーズをしてから歌う、ということを毎回繰り返すことで、積極的に活動に参加しやすくする。座ったままあそび始め、途中から立って全身を使う活動にする。

・「しあわせなら手をたたこう」作詞：木村 利人 アメリカ曲

「しあわせなら…」の後の部分のアイデアを子ども役からもらい、即興的に動作をつけて表現し歌う。

子ども役からアイデアをもらうことで、その場にいる子ども達がお互いを意識し合い、あそびの楽しさを共有できる。

座ったままの表現から徐々に動きを大きくし、最後はその場にいる全員で動く。次のあそびに繋げるために、円になり座って終われるように遊びの流れの中で自然に誘導する。

・「バスごっこ」 作詞：香山 美子 作曲：湯山 昭

バスを運転するイメージを強調するポーズと掛け声で始める。隣の人や周りの人と関わりあいながら進行し、その場にいる全員であそびの楽しさだけでなく達成感も共有でき、仲間との絆を深めることができる。

・あそびの解説

子ども役として音楽あそびの30分のプログラムを体験した後に、ひとつひとつのあそびの解説や30分の構成について、保育者（リーダー役）の表情、声の出し方、言葉の選び方や大切にしてほしいことについても伝える。

(2) 音楽あそびをグループで創作・発表

小人数（5～8名）のグループに分かれて、1年後期中間試験課題曲である「大きな栗の木の下で（作詞：平多 正於 作曲：不詳）」をグループごとにアレンジする。子ども達との活動を前提にする以外は自由な発想で歌詞や動きを創作して発表する。

元の歌詞の名詞や動詞のみを変化させたり、助詞も含め全体的に変化させたり、物語風や日常の約束事を歌にのせたりとグループごとに違う個性が見え、あそびの展開の可能性の広さを感じることができた。

4-4-2. 終了後の学生の感想

- ・子ども役として純粋にあそびを楽しんだ後に解説を聞いて、活動に楽しく取り組めるよう様々な工夫があったことを知った。
- ・保育者が笑顔であるとその表情につられてよりあそびを楽しむことができた。
- ・同じ歌でも対象年齢に合わせて遊び方を変えることによって、それぞれ楽しむことができるのだとわかった。
- ・ピアノ演奏があそびの世界観をより深める効果的なものであることを実感し、自分も努力してピアノを上達したいと思った。
- ・保育者自身が楽しんで活動することの大切さを実感でき、自分もそのようにやりたいと思った。
- ・自分の好みだけでなく一つ一つの曲の良さを見つけて、自分も楽しみながら子ども達と音楽あそびをしたいと思った。
- ・グループごとに遊びを創作するのがとても楽しく、他の人のアイデアがとても参考になったし刺激を受けた。また、意見を出し合うことであそびの可能性が広がることを実感できた。

4-4-3. 授業を終えて

弾き歌いの技術の向上は音楽活動の世界観を広げ表現を深めることや、子ども達の音楽活動をより楽しく豊かにすることに繋がる。学生達は日頃弾き歌いを学んでいるからこそ、活動の中で教師の演奏するピアノが音楽あそびの世界観をより深めていることに気づき、自身の技術の向上を目指す意味を再認識して授業へのモチベーションを高められたように感じた。

しかし、弾き歌いの技術の向上は一朝一夕では難しく、継続的な課題となり時間がかかるものである。

自身の演奏を未熟だと感じている段階で音楽活動を行う際でも、まず大切にしてほしいことは「保育者が心から楽しいと感じて臨むこと」である。

保育者の感じていることは言葉にしなくても子ども達に伝わる場所がある。だからこそ自身が本当に楽しいと感じて子ども達と向き合うこと、声の出し方・表情・言葉の選び方など様々な工夫をして表現することを大切にしてほしいと願う。今回の授業では、保育者が心から楽しみつつ音楽あそびの楽しさを伝えるということを私なりの方法で表現し、学生達に自分ならどう表現するかを考えてもらいたいと考えた。学生達の表情や感想からも、楽しんで音楽活動に参加し、各々が自身の表現について考えるきっかけを持ってもらえたようだった。

後半で同じ曲を題材としグループごとに遊びをアレンジする体験では、音楽あそびの展開の仕方、あそびの可能性の広さを知ってもらえたと感じる。授業で扱う課題曲ひとつひとつで何を伝えたいのか、感じてほしいのか、また子ども達とどんな風に歌うのか、遊ぶのかを常にイメージしながら向き合うことの重要性を実感してもらい、自身の音楽活動に活かしてもらいたいと願う。

今後の展望としては、今回は自由な発想で遊びの展開を考えてもらったが、具体的な保育の場面を設定とした遊びを展開させて、より実践を意識した実践に近い形で体験ができる授業にしていきたい。

(久 弥生)

5. まとめ

4回の集団授業はどれも子どもとの音楽活動に役立つための実践的な授業として実施された。どの授業も音楽と身体活動の関わりのある内容であった。子どもの音楽活動について音楽教育家のアロノフは次のように述べている。身体活動を使っの音楽教育は幼児向けのカリキュラムの中では非常に重要である。認識力を高め、主体的にかかわらせ、そしてそれにともなう情緒も養うゆえに、音楽的身体活動が幼児の知能、情緒の相互発達に貢献するものは大きい(アロノフ 1990: 20)。集団授業では、学生自ら子ども役となって参加することにより、子どもの音楽活動における音楽と身体活動の関わりについて体験することができた。

それでは、集団授業の効果について考察する。まず、終了後に提出されたのべ202名の学生の感想を基に検証していきたい(感想の提出を実施していない授業もある)。感想は自由記述式で書かれたため、こちらで内容を読み取って考察する。これらによると、おおむね集団授業への評価は高いことがうかがえた。集団授業の目的の1つである実際の子どもの音楽活動の様子を知ることができるかについて考察したい。半数以上ののべ110名の学生が子どもの音楽活動に関する記述をしている。具体的に挙げると、「子どもの音楽活動がどのようなものか実際に体験し知ることができた」、「子どもと音楽と保育をつなげると楽しく活動できるのだと思った」、「子どもの音楽活動の具体的な内容や流れを知ることができて良い経験となった」、「こどもたちに音楽を伝える時に大切なことなど普段の授業では学ぶことのできない内容を知ることができた」、などである。さらに、「保育の活動で取り入れたい」、「今後自分が音楽と関わる時や子ども達と遊ぶ時に活かせたらいいと思った」、「これからの実習や将来保育士になった時に子どもたちと実践してみたい」、「今日の学びをいかして実習等でうまく活用したい」、などといった将来に結びつく意欲のうかがえる記述もあった。これらを踏まえると集団授業が一定の効果をもたらしたと考えられる。

一方、もう一つの目的である保育者の音楽性を高めることについては、学生の感想からその効果を測るのは難しい。「子どもの音楽Ⅲ」・「子どもの音楽Ⅳ」の授業の到達目標の中にも掲げている「子どもの音楽表現活動に必要な即興演奏、アレンジメント」に絞って読み取ってみたい。即興演奏、アレンジメントについては、日頃の限られた弾き歌いの授業時間の中ではじっくりと時間をかけられない部分もあるが、集団授業の音楽表現活動を自ら体験する中で即興活動を行ったり、講師の即興演奏やアレンジメントに触れたりすることができる。それらに関する記述をした者は6割ののべ121名おり、関心の高さがうかがえ

た。具体的に挙げると、「ピアノのアレンジの仕方を参考にしていきたい」、「歌い方に合わせた曲調にアレンジして弾くことも実践の場ですぐできるようにもっと学んでいこうと感じた」、「ピアノで練習しているいろいろな状況や場面に合わせてアレンジできるようになりたいと思いやる気がでてきた」、「ピアノの伴奏もそのやりたい雰囲気によって弾き方を変えると全然違う曲になって、私もこんな風にできるようになりたい」、などである。弾き歌い授業の締めくくりである「音楽Ⅳ」の後期期末試験では、子どものうたの弾き歌いと共に＜メリーさんの羊＞のアレンジメントが課題であった。学生たちは四苦八苦しながらもアイデアと工夫満載の作品を創りあげ、その演奏は私たちを驚かせ楽しませてくれる作品ばかりであった。それは日頃の弾き歌い指導と共に、集団授業が大きな役割を果たしたと考えられ、保育者の音楽性を高めるという目的に一定の成果を見出せたと考えている。

一方で、今後の課題として、前期と後期の集団授業同士の関わりをどのようにしていくかといった検討の余地もある。現在のように毎回完結するものを行うか、あるいは継続性を持ったものを行うか。それらを踏まえ、さらなる効果を期待できるように集団授業に取り組んでいきたいと考えている。

音楽教育家の三森は幼児の音楽表現について次のように述べている。幼児の音楽表現は、歌う、ひく、創る、身体表現する、聞く、などの活動が総合的な状態で現れる。この表現活動は、心身の発達、幼児をとりまく環境、人と人とのかかわり、家庭生活、集団生活との関係、遊びの発達などの影響によってさまざまな姿で表現される。こうした音楽的な経験を積み重ねていくことによって、音楽的表現がさらに豊かになり、心身の成長発達が促されていく（三森1991：23）。このような子どもの音楽表現、発達を知ったうえで、学生には音楽活動において自らも楽しみながら子どもたちの援助ができるよう、集団授業を活かしていったほしいと願っている。2018年3月、子ども支援学科から初めての卒業生が巣立っていく。彼らの活躍を心から応援すると同時に、私たち指導者も引き続き向上心を持って指導にあたっていきたい。

（鈴木 顕子）

注

- 1) 2012年アメリカで、2015年日本で公開された映画「Pitch Perfect」の中で、出演者がカップを鳴らしながら歌っている場面がある。その場面のリズムフレーズを採譜、カップの鳴らし方を模倣したものを、集団授業で行った。

参考文献（著者姓のアルファベット順）

- ・ Aronoff, Frances Webber アロノフ, フランセス ウェバー
1969 *Music and Young Children*. New York : Holt, Rinehart & Winston of Canada Ltd.
1990 日本語訳『幼児と音楽』畑 玲子（訳）東京：音楽之友社.
- ・ McDonald, Dorothy.T; Simons Gene.M マクドナルド, ドロシー. T; サイモンズ, ジェーン. M
1989 *Musical growth and development ; Birth through six*. New York : Schirmer books.
2009 日本語訳『音楽的成長と発達—誕生から6歳まで—』神原 雅之他（訳）広島：株式会社溪水社.
- ・ 三森 桂子他
1991『幼児と音楽教育』 東京：株式会社大空社.